

洪水大陸を呑む

海野十三

青空文庫

ふしぎな器械

「ぼく、生きてるのがいやになった」

三四郎が、おじさんのところへ来て、こんなことをいいだした。

「生きているのがいやになったって。これはおどろいたね。子供のくせに、今からそんなことをいうようじゃ心ぼそいね。なぜそう思うんだい」

しらが頭に、度につよい近眼鏡をかけた学者のおじさんは、本から目をはなして、たずねた。

「だって、ちつともおもしろいことがないんだもの」

「ふん、なるほど」

「おなかはいつもすいているしね、ほしいものは店にらんでいるけれど、高く買って買えやしないしね」

「ああ、そうか、そうか」

「その品物だって、とびつくほどほしいものもないし、それから大人おとなの人は、みんな困つ

た困ったおもしろくないおもしろくないといっているしね、ぼくは大人になるのがいやになつたの」

「なかなか、いろいろ考えたもんだね。大人になるよろこびがなくなつては、もうおしまいな。しかしだ、生きているのがいやになつたなどというのは人間として卑怯だと思う。また人間というものは、もつと広い世界へ目をやり、遠い大きな仕事のことを考えなくてはならない。いや、そんなお説教をするよりも、今おじさんが三四郎君を一万年ばかり前の世界へあんないしてあげよう。そこで君は、どんな感想をもつだろうか。あとでおじさんは、君に質問するよ」

「ほんとですか。一万年も前の世界へ行くつて、そんなことはできないでしょう」

「いや、それがちやんと、できるのだ。おじさんがこしらえた器械をつかえば、そういう古い時代の有様が見えるんだ。映画のようにつるんだ。ただ残念なことに、その時代の人々がしゃべっている声が、十分に再生できないんだ」

「じゃあ、トーキではない無声映画というのがありますね。あれみたいなものですか」

「全然無声というわけでもない。映写幕にうつる古代の人々が、ものをいうときに、口をうごかす。その口のうごかし方から、彼らがどんなことをばをしゃべっているのかを、ほ

んやくすることもできるのだ。しかしこのほんやくことばは、画面の上で、私たちの方へ向いていて、口をうごしかしている人にかぎるんだ。だからうしろ向きの人のいつていることばは分らない。そんなわけで、ときどき、切れ切れながら、彼のいうことばが分るんだ」

「ふしぎな器械ですね。しかしそれはおもしろいですね。しかしほんとうかしら」
「見れば、ほんとだと分るだろう」

「ああ、そうか。その器械は航時器（タイム・マシン）というあれでしょう」

「あれとは、ちがう。頭けんびしゅうはき微集波器と、私は名をつけたがね。つまりこの器械は、一万年前から一万年前の光景が、光のエネルギーとして、宇宙を遠くとんでいくのだ。そして他の星にあたると、反射してこっちへかえってくる。星はたくさんある。ちようど一万年かかって今地球へもどってくるものもある。それをつかまえて、これから君に見せてあげよう」

一万年前の大陸

おじさんのいうことは、よく分らなかつたけれど、おじさんが見せてくれた映画——ではない、「うごく一万年前の光景」は、なかなかおもしろくて、よく分った。それは、大事などころになると、おじさんが説明をしてくれたから、なおさらよく分ったのだ。

約一万年前の世界が、おじさんの器械の映写幕の中に見えるのだ。なんというおどろき、なんというふしぎ！

その場面の多くは、上から下を見た光景であつた。おじさんは、ときどき器械のスイッチを切りかえて、ななめ上から見た光景も見せてくれたが、これはすこしだけであつた。ま横から見たところや、正面から見たところは、ほとんど出てこなかつた。それは横へ出る光は、他の部分から出る光にじやまをされて、純粹な形では出にくい。だから見えにくいのだということだつた。

「なんでしようね、山脈のむこうに二つ光っているものがありますね」

三四郎は、おじさんにたずねた。

「あれは月だよ」

器械の目盛をあわせていたおじさんは、かんとんに答えた。

「うそをいってらあ。月なら、ぼくだつてわかりますよ。月が二つもあるわけがないじや

ありませんか」

「ところが、それがあるんだよ。この光景にうそはない。一万年前には、地球のまわりを月が二つ、まわっていたんだね」

「ふーん。おどろいたなあ」

「二つの月のうち、その一つは、なくなつた。見ていたまえ、やがてそれが見えるはずだ、一方の月がこわれて見えなくなるところがねえ」

「そんな光景が見えるんですか。ぼく、背中がぞくぞく寒くなつた」

「それはそうだろう。月がなくなるなんて、たいへんな事件だ。それがために、当時地球に住んでいた人類は、どんな目にあつたか。どんな苦しみにあつたか。見ていたまえ、今にそれが見えるから……」

「お月様は今すぐこわれるんですか」

「まだ、ちよつと間がある。——この器械は途中をどんどんとぼして行くが、今うつつているときからかぞえて、約百年のうちに、月の一つがこわれる」

「百年間も、この器械の前に待っているのですか」

「いや、この器械では、あと十五分ぐらいで百年後の光景がうつり出すことになっている。

今おじさんは、地^{ちひよう}表の光景をもつとはつきり出そうとして一生けんめいやっているのだよ。ほらほら大陸の海岸線ははつきりしてきたろう。白く光っているのが海、くらいのが陸地だ。このへんは、地球上のどこだか分るだろう」

おじさんは、えんぴつを手にもって、画面をさした。

「ああ、分かりました。ヨーロッパですね。このへんがスペインにポルトガル。おやおや、ヨーロッパ大陸と南のアフリカ大陸とがつながっていますね」

「まあ、そうだ。さあ、これから画面の方を移動して行くよ。何が見えるか。」

「大西洋だ」

「そうだ、大西洋だ。だが、これからよく気をつけて見ていたまえ」

「おやおや、へんだぞ。大西洋の中に大陸がある。これは一体どうしたんでしよう」

三四郎は、大西洋のまん中に、相当大きな大陸のあるのを見て、ふしぎがった。

「あれはアトランチス大陸だ。当時、世界の文化はアトランチス大陸に集っていたのだ。

世界の中心だったんだ。エジプトの文化も、ユーラシア大陸の文化も、まだ誕生前だったんだ」

「でも、今大西洋には、そんな大陸はないじゃありませんか。どうしたんですか」

「さあ、それが大事件なんだ。まあ、しばらく見ていたまえ。器械を調整して、アトランチス大陸の地上へ焦点をあわせてみよう」

おじさんは、器械の前で、いそがしく調整をはじめた。たくさんある目盛盤をいくどもうごかし、そして計器の針をみては、また目盛盤をうごかすのであった。その間に、映写幕にうつっている像はいくたびかぼんやりとなり、またいくたびか川のように流れ、それからまた、たびたび消えた。

だが、そのうち像は次第にはつきりして来た。山が見え、川が見え、それからりっぱな建築物が見えだした。やがて焦点が地上にはつきりあうと、道のあるいていく人々の姿が見えるようになった。ただし、斜め上から見たところなながうつっている。ちようど、ビルの三階ぐらいから地上を見下ろしたような調子であった。

「アトランチス人だ。りっぱな服装をしているだろう。エジプト時代よりもずっと文化が高かったことが分る。男と女の区別も、ちゃんと分るだろう」

おじさんの説明に、三四郎はかたずをのんで画面に見入っていた。美しくかぎって白馬が通る。

「ほら、道で立ち話をしている。二人の男の話が唇のうごきで分る。よく耳をすましてい

たまえ」

おじさんが注意した。と、なるほど、かすかではあるが会話が聞える。

“なげかわしいことだ。こんなに道義がすたれては、生きてるのがいやになった”

“あくことをしらないこの頃の人間の欲望。神をおそれない人々。いくら美しく飾りたてようと、これは人間の世界ではない。禽きんじゆう獣の世界だ”

“今に、天のおさばきがあろう。いや、すでにそのきざしが見える。君は気がついてるか”

“うん。君は弟おとうとつき月のことをいつているのだろう。弟月が、だんだんあやしい光を強め、大きくふくれて来るわ。気味のわるいことだ”

“天のおさばきは近くにせまったぞ。今となつてはおそいかもしれないが、わしはもう一度人々にそれを知らせて、反省をうながそう”

“それがいい。わしも生命のあるかぎり、悪魔にとりつかれている人を一人でもいいから神の国へ引きもどすのだ”

二人のアトランチス人は、そこで話をやめて、しずかに祈りをささげると、右と左とに別れた。したがって、そのあとの声は聞えなかった。

三四郎の目には、いつしか涙がやどっていた。信仰のあつい二人のアトランチス人の胸中を思いやっつての涙であった。

大陸の最後

「こんどは、弟月の方をおつかけよう。さつきよりもずっと大きくなっているはずだ」
おじさんはそういつてスイッチを切りかえた。

地平線が黒く横にのびている。その上に、月は高くかがやいていた。

「これは兄^{あにつぎ}月の方だ。弟月はもつと左の方にある」

画面が横にうごいて行く。と、とつぜん画面が明るくなった。そしてちようちんが画面いっぱいに出てきたと思った。ところがそれはちようちんではなく、弟月の方だった。兄月にくらべて、もう二三百倍の大きさになっている。

「これが弟月ですか。大きいですね。なぜこんなに大きくなったんです」

「弟月はだんだん下つてきたのだ。地球の引力によってひきよせられたんだ。見ていてごらん。今に弟月は地球にぶつかるから……」

「おじさん。月が地球にぶつかつたら、どんなことがおこるんですか」

「見ていたまえ。もうすぐだ」

画面は四五回も切りかえられた。そのたんびに弟月は化物のように大きくなった。まるで地球が空にうつつているようであった。

その怪月の下に、アトランチス人たちが集つてふるえ、のろいの声をあげ、やけになつて人殺しをし、またしずかに神に祈りをあげているのが見えた。方々に、えんえんと火がもえあがつていた。神へささげるかがり火か、それとも賊が民家に放つた火か。ものすごい光景に、三四郎はたびたび目をふせねばいられなかつた。

「ほら、始まつた。弟月が地球に触しよくせつしたよ。あれ、あのように地球にぶつかつている。しかも弟月は自転をつづけているんだ」

おじさんの説明の聲がふるえている。

「あつ、おそろしい！」

三四郎は、両手で自分の頭をおさえて、がたがたふるえだした。

見よ、弟月は地球にぶつかつている。そこは大洋らしい。すごい火花と焰と電光が、たがいに交じりあつて、目もくらむほどだ。波はさかまき、雲とも湿気とも煙ともつかない

もやもやしたものが触接面のところから空高くまいあがる。月は、ときどき空の方へとびあがり、そのあとでまた落ちて来て、地球に衝突する。そのたびに、すごい火の地獄絵がひろがる。月がとびあがったときに見えたが、あの死灰のようであつた月が、今はその下半分が炉の中へほうりこんだ石炭のように赤く赤くもえあがっているのだった。

「おお、弟月の最後が近づいた。大爆発をして、こなごなにとび散るよ、あの弟月が……」
おじさんの声が終らないうちに、画面は目もくらむ閃光で、ぴかぴか、くらツくらツと光り、画面に、ものの形を見わけることができなかつた。三四郎は、天変地異のおそろしさに、大きな声をあげてその場にうち伏した。もう画面を見つづける勇氣はない。

「……もうすんだよ。弟月は、かげも、形もなくなつたよ。これからが最も大事なところ。すごい光景が見えるんだ。元気を出して、もう一度画面を見てごらん。なにしろ一万年前の出来事なんだから、そんなにこわがることはない」

おじさんに元気づけられて、三四郎はようやく顔をあげ、映写幕へそつと目をやった。もはや天空に火の魔の乱舞は見られなかつた。兄月の冷たい光だけが、空にあつた。下半分はアトランチス大陸が、鯨の背のように黒ずんで、海の上に浮かんでいて。

このとき海が、にわかにくれ上つた。高く高くふくれ上がる。あたらしい大陸が出来

て、それがうごき出したのかと思つたくらいであつたが、事實は黒い海水がふくれあがつたのだ。高く高くアトランチス大陸の山脈よりももつと高く！そしてそのふくれた海は、ずんずんと大陸へ近づいて来るのであつた。

「あつ、津波だ。すごい津波だ。アトランチス大陸が、津波にのまれてしまう」

三四郎は、思わず叫んだ。

「そうだ。アトランチス大陸が、今や波にのまれてしまうのだ。そしてすばらしい文化を持ったその大陸が、永遠に波の下にのまれてしまうのだ。人もけだものも、それから鳥やコウモリまでも、みんな翼の力が及ばないで、波の下にのまれてしまうのだ」

そのとおりだった。三四郎は、おそろしくも悲しきアトランチス大陸と人と生物との最後を見とどけた。そのために彼は、全身の力をつかい切つたと思つた。

希望の光は

「なぜ——なぜアトランチス大陸は、海の下に沈んでしまったの」

三四郎は、あえぎながら、たずねた。

「月の一つがなくなったら、地球の上の潮のみちひきが変わったのだ。月の海水に働く引力によって、潮のみちひきが起り、また海の水の高さがきまるのだ。月が一つなくなつたために、アトランチス大陸のところでは海の水位があがって、大陸をのんでしまったのだ。自然の力は、大きいもんだね」

「人間の力なんて小さいですね」

「そうもいえまい。だつてアトランチス大陸は亡んだが、それから一万年以上たつて今はどうであろう。このとおり人間はいたるところにふえ、世界は栄えているのだ」

「そうだ。いつの間にか人間がふえた」

「文化も進んだ。アトランチス時代には、思いもつかなかつたことだが、今は人類は空をとぶことも出来る。また原子力を使って、大きな土木仕事をおこしたり、宇宙旅行をすることも、やがて出来るのだろう。もしアトランチス時代に飛行機があり、原子力を使うことを知っていたら、多数の人が、他の大陸へ渡つて生き残つたかもしれない。——自然の力も大きいけれど、たゆまず努力していく人間の力もまた、ばかにならないものだ」

「敗戦日本には今一台の飛行機もないけれど、わたしたちと同じ同胞であるアメリカ人やイギリス人やソ連人などは、たくさん飛行機を持っている。だから人類全体として考え

ると、わたしたちはやっぱり飛行機をうんと持っていることになるんだ。そうですね、おじさん」

「そういう考え方をしてもいいね。日本人がもつともとりっぱな行いをするようになって、世界の人々から信用されるようになったら、そのときには日本人にも飛行機をのりまわすことが許されるだろう。悲観することはない」

「じゃあ、原子力を使って、宇宙旅行をする日もやがて来ますか」

「日本人に対する信用が回復すれば、そういう日も来るにきまつている」

「うん。そんなら、いいなあ。じゃあ、ぼくたちは今からうんと勉強をしておかなくてはね。さあたいへんだ。急に仕事がふえたぞ。ぐずぐずしてられないや」

「三四郎君。君は今日うちへ来たとき、生きてるのがいやになったといってたが、今はどうだね」

「おじさん。あんなことは、もう思っていないですよ。それよりも、ぼくはうんと長生きをしたいと思うようになりました。うんと長生きをして、われらの世界同胞のために、すばらしい発明をしたり、住みよい世界をつくったり、そのほかすることがうんとふえましたよ」

「それはよかった。きみの考えがかわって……」

「今ぼくらは苦しいのだの、つまらないのだの思っているけれど、アトランチス人の最後のことを思うと、ぼくらは元気を出さなくてはならないと思いました」

「それを聞いたら、あの人たちも浮かばれることだろう」

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第二巻 四次元漂流」三一書房

1988（昭和63）年12月15日第1版第1刷発行

初出：「まひる」

1947（昭和22）～1948（昭和23）年頃（掲載年月日不詳）

入力：tatsuki

校正：kazuishii

2005年12月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

洪水大陸を呑む

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>